

# 行為としての認識について

鬼 界 彰 夫

本試論では行為主義的認識論<sup>(1)</sup>と我々が呼ぶ、知識に関する一つの見方のアウトラインを描いてみたい。この立場の具体的な内実は それに 対立するもうひとつの見解——それは通常表象主義と総称される——との対比を通じて始めて明らかとなるものなので、表象主義的認識論の批判的論述から議論を始めたいと思う。

## I 表象主義的認識論とその誤り

ここで我々が表象主義的認識論と呼ぶのは、何かを知るとはその表象に関わるある活動に従事することだと考える立場である。知られる当の対象は物や人であることもあれば、出来事であることもある。またここでいう「活動」の例としては知覚、想像、思考等広範囲なものが考えられる。更に表象そのものの形態についても同じ表象主義の内部にあって様々なヴァリエーションが存在する。例えば近代表象主義的認識論の祖ともいべきデカルトにとって認識における表象の基本形態は観念であるし、英米の現代経験主義的認識論<sup>(2)</sup>にあっては信念 (belief)こそが「知る」という過程に関わる最も基本的な表象の形態である。このように我々が表象主義的認識論と呼ぶものの中には相異なる様々な立場が含まれる。にもかかわらず我々がそれらを「表象主義」の名の下に一括して論ずるのは、その何れもが「知る」ということを表象という概念を通じて規定しているからに他ならない。

この表象という概念自身はつぎの二つの本質的特徴によって規定される。(i)表象とは何かを代理、代表、あるいは表現するものであり、あらゆる表象は何物かの表象である、(ii)ある表象とそれが表象するものは二つの相異なったものである。従って認識論における表象主義とは、「知る」という過程は知る者と知られる物の関係が知られる物を代表する表象を媒介して変化する過程である、と考える立場の総称であると言

えるだろう。今表象主義をこの様に規定すると、その論理的帰結として「知る」ということに関して一つの重大な結論が導かれる。まさにこの結論の故に我々は認識論における表象主義そのものを疑わざるを得ないのである。

その結論とは、知識は必ず基礎づけられた知識でなければならない、ということである。我々の知識が基礎づけられているとは、我々が単にある事柄を知っているのみならず、何故それがそうなのかも知っていることを意味する。従って表象主義によれば、我々が何かを知るためには、同時にその根拠、理由をも知らなければならない、ということになる。この「基礎づけられている」という概念は表象主義のそれぞれのヴァリエーションによって異なった風に表現されている。例えばデカルト認識論にあっては「明晰判明である」ことが「基礎づけられている」ことであり、現代認識論にとっては「正当化されている」<sup>9</sup>ことが「基礎づけられている」ことなのである。こうした違いにもかかわらず、知識が独立した基礎づけを必要とする、という点に関してあらゆる表象主義は一致しているように思われる。

こうした結論が表象主義の本質そのものからどのように導かれるかを理解するのはそれほど困難ではないだろう。表象の基本形態が観念であれ、信念であれ、ある対象について我々は様々な表象を持ちうる。その中のある表象は対象を正しく表現する「真なる」表象であり、他の表象は対象に対応しない「偽なる」表象である。もし「知る」ことがある対象の表象を保持することであるとすれば、その表象は「真なる」表象でなければならないのは言うまでもないが、それだけでは未だ十分ではない。何故なら偶然の一致により「真」となった表象はいかなる基準によっても知識とはみなし得ないからである。例えば私があてずっぽうに「当たり籤は1051番だ」と言い、たまたま1051番が実際に当たったとしよう。この場合私は当選番号の発表以前に当たり籤を知っていた訳ではない。私は「当たり籤は1051番だ」と推測していたにすぎず、そうだと知っていたのではない。それは「当たり籤は1051番だ」という私の考えと、1051番が実際に当たったという事実の間に何の繋がりもなく、両者が偶然に一致したにすぎないからである。この例が教えるのは、仮に（表象主義が言う様に）知識が表象であるとしても、知識であるために表象は単に真であるのみならず、それが表象する対象とのしかるべき繋がりのおかげで真であるのでなければならない、ということである。この繋がりこそが、我々が基礎、根拠、理由等と呼ぶものに他ならない。この「基礎」こそが偶然の一致により真となった表象と知識を区別するものである。更に、もし私

が自分の保持する表象についてそれがこうした基礎を持つか否かについて定かでなければ、この時この表象は私にとって推測以上の意味を持ちえないから、表象の保持を通じて知識を得る為にはそれが基礎づけられていることをも私は知らなければならぬ。言い換えるならば、ある表象の保持が知識を構成するためには、その表象は単に真であるのみならず、真なる表象として我々に与えられねばならない。ある表象が真なる表象として与えられる時、その表象は対象とのしかるべき繋がりのおかげに我々に対象について何かを告げる、すなわち我々は対象について何かを知るのである。表象のこうした基礎がいかなる形態で我々に与えられるかは上述の様に表象主義の各ヴァリエーションが異なった見方をしているが、我々の知識は基礎づけられた知識でなければならないという点においてそれらは一致している。それは表象という概念が内包する必然的帰結である。

我々は「知識は必ず基礎づけられた知識でなければならない」というこの結論は知識の学としての認識論にとって極めて不幸なものと考えますが、それには以下の二つの理由がある。

第一はこの結論に反し、現実によくの場合我々は何故そうなのかという根拠を知らないにもかかわらず様々な事を知っているように思われる、ということである。確かに何かを知るためにその根拠をも知らなければならぬというケースは数多く存在する。例えば科学的な方法を通じて何か新しいことを知ろうとする場合はその典型である。もしある科学者が自分の理論が正しいことを知ろうとすれば、彼はその根拠を知らねばならない。さもなければその理論は彼にとって推測や暗唱された芝居の台詞と変わることがないであろう。しかしながら我々はいつも科学者が理論を確立するような仕方ですべてを知る訳ではないし、科学者自身も常にこうして物事を知るのではない。研究所から外に出て雨が降っているのを知る時、水を飲んでそれが水だと知る時、異邦人の日本語に外国語訛を認める時、我々はその身分や職業に無関係に、こうした事実を単に事実として知る。その時我々は何故こうした事実が事実なのか、すなわちそれらの根拠を全く知らないにもかかわらずそれらが推測ではなく事実だと知っているように思われる。この様に、あるケースでは我々が何かを知るためにはその根拠を知らねばならず、別のケースではそのような必要がないように思われる。今仮に第一の知識の形態を理論的知、第二の形態を非理論的知と呼べば、表象主義の帰結とは、科学的認識に代表される理論的知のみが知識であり非理論的知は実は知識ではない、

ということに他ならない。しかしこの結論は単に非理論的知を知識から排除する以上の意味を持っているのである。科学的実践、とりわけ観察という行為において我々はある事実を単に事実としてのみ認識しなければならない場面には必ず遭遇する。たとえばメーターの読みがしかじかである、といった場合である。この時我々はそうした事実を非理論的知としてのみ知る。更に一般的に我々が理論的知として何かを知る時、このように単に事実としてのみ知られる事実が常に存在する。非理論的知が知識にあらざる何かであるというのは、こうした「事実」が事実としては我々に知られていない、すなわちそれらは我々にとって未だ事実ではないということである。だとすれば科学的認識のような理論的知すらもその最も根本的なところで事実とは繋がっていないことになる。つまり知識は事実に関する知識ではなく、事実そのものは決して我々に知られないということになるのである。「事実との本質的繋がりを失った知識」、表象主義はこうした極めてパラドキシカルな概念を内包しているのである。

表象主義の帰結が受け入れ難いものである第二の理由は、もしこうした知識と事実の分離という帰結を避けようとするれば、表象主義に基づく認識論という営みが、予め定められた結論に「理由」を装飾的に付与する儀礼的行為に墮落し、理由と結論の間の生きた繋がりが失われてしまうことである。その時「理由」はむしろ理屈あるいは合理化と呼ばれるべきものとなろう。デカルトを例にとろう。彼は我々には手足があるとか、三角形の内角の和が二直角であるといった事実すら疑う所からその哲学的営為を開始した。というのも彼は、我々はそうした事柄の観念を持っているにすぎず、それらが果たして事実に対応しているかどうかについては未だ何も知らない、と考えたからである。この懐疑を解消するに際しデカルトがその根拠としたのは言うまでもなく「明晰判明な観念は真である」ことの認識であり、この認識自身の根拠となったのは「我々の創造主である神が存在し、その神は我々を欺かない」という高次の認識であった。更にこの認識の根拠となったのは「原因には結果と少なくとも同量の実在性が含まれる」といったいくつかの公理ともいべき事柄の認識であり、これらの認識の究極的な根拠とされたのが「自然の光りが我々に教える事柄は真実である」という普遍的認識であった（以上『省察』第三省察）。今我々が問題にしたいのは、このデカルトの根拠の連鎖を構成する各々の事柄が果たして彼が主張するように事実そうであるのか否かでなく、それらすべてが最初に疑われた事柄と全く同じ理由によって疑わなければならない、ということである。そもそもデカルトが「我々は身体を有す

る」ことを疑ったのは、この事柄が我々には事実そのものとしてでなく、単に「観念」としてのみ与えられる（とデカルトが考えた）からである。しかし「知る」ことが「観念の保持」であるとするれば、いかに確からしい内容であれそれは我々に「観念」としてのみ与えられるのである。従っていかにデカルトのように根拠の連鎖を延ばしてみたとしても、もしその第一項が「観念」であるがゆえに疑われなければならないのなら、この連鎖全体が等しく疑われなければならないのである。このように考えるのが知的良心というものであろう。このように懐疑を開始しながら、もし最初に疑われた事柄を救済するためにデカルトのようにこの連鎖をどこかで中断しようとするれば、それは全く恣意的な決定によるしかなく、その時与えられる「理由」はこの決定の恣意性を被い隠す粉飾でしかないだろう。こうした操作が意識的になされればそれは知的不正であり、それと意識されることなくなされればそれは一種の自己欺瞞である。こうした精神の弱さは決してデカルトの個人的資質に帰されるものではなく、我々と事実とを根本的に切り離すという表象主義の本性の内に秘められているのである。

このように表象主義は、その誠実にして勇敢な信奉者にはデカルトの「悪しき霊」や現代認識論の「水槽中の脳」<sup>4)</sup>の如き全面的懐疑に留まることを強い、弱き精神には知的不正もしくは自己欺瞞を迫るのである。

では全面的懐疑を受け入れ、知識を諦めるのが我々が選ぶべき途なのだろうか。我々はそうは考えない。そもそも我々が何かを疑う時そこには特定の理由があり、この理由が我々が何かを受け入れるのを躊躇させるのである。では表象主義固有のこの全面的懐疑の理由とは何であろうか。それは個々の事柄が疑わしいということではなく、認識において我々に与えられるのが事実そのものではなくその表象にすぎないという表象主義の根本前提そのものなのである。言い換えるならば、この懐疑において我々は表象主義の前提を無条件に事実として受け入れ、そのゆえに他の一切の事実を疑っているのである。ここで何故表象主義そのものを疑ってみないのだろうか。そうしていけない理由はなにもない。そればかりか、現に我々が様々な事実と接しながら生きているということは表象主義を疑うべき有力な理由であるように思われる。現実に関心を知る時果たして我々は表象主義が言うようなことを経験しているのか、これこそまず問われるべきであると我々は考えるのである。

この様に我々は表象主義的な知識観に重大な疑いを抱かざるを得ない。これこそが行為主義的認識論なるものをここで考えてみようとする理由なのである。しかし知識

を異なった風に見るとは決して表象主義で想定されている様々な表象過程、例えば何かの観念を持つとか、なにかの感覚印象を受け取るとか、ある信念を持つといった過程が虚構であることを意味しはしない。そうした過程を我々は現に日々経験している。行為主義的認識論として我々が主張したいのはそうした過程が存在しないということではなく、「知る」というのはそうした表象過程とは全く異なったことであり、そうした過程に従事している時我々は未だ物事を知ってはならず、表象に接してはいるが事実には接していない、ということである。では「知る」とはどのようなことなのだろうか、どのようにして我々は表象でなく事実に接するのだろうか。「知る」とは行為もしくは活動であり、この活動を通じて我々は事実に接する、というのが行為主義的認識論が与えようとする解答である。

## II エネルゲイアとキーネーシス

我々は今、「知る」とは行為あるいは活動であると言った。しかしこれは未だ極めて不正確な表現である。何故なら感覚印象を受け取るといった表象過程も又我々が「する」何かであり、その限りにおいて広義における「活動」の一種とみなし得るから、いかなる意味において「知る」と「表象を保持する」ことが相異なるのかが明らかでないからである。今こうした表象に関わる活動を表象活動と呼ぶとすれば、知るという活動が表象活動とどのように異なっているのかを明らかにすることが、行為主義的認識論を展開する上で決定的となるのは明らかだろう。我々はこの重要な区別がアリストテレスによるエネルゲイア（活動）とキーネーシス（運動）という概念対においてとらえられていると考える。言うまでもなくこれは決して偶然の一致ではなく、アリストテレスの知識観と行為主義的認識論と我々が呼ぶもの間に深い類縁関係を暗示していると考えなければならない。

アリストテレスはこの有名な区別を『形而上学』IX-6<sup>6</sup>で行っている。それによれば両者の根本的な違いは次の様なものである。

キーネーシスはある主体が一つの状態から別の状態へと移行する過程一般を指す。この「状態」に含まれるものの範囲は極めて広く、主体の空間的位置や状態であることもあれば、主体がもたらす客体や環境の状態であることもある。いずれの場合にせよ、キーネーシス過程とはその始まりにおいて未だ実現されていない状態をもたらす

過程であり、このもたらされるべき状態は全過程の目的であると同時に終結点と考えられる。従ってキーネーシスはその終結点において初めて完成されるものであり、過程の各瞬間においては未だ完成されておらず、この意味で不完全な活動とも言われる。アリストテレスの有名な言葉を借りるなら、我々がそれを行っている時未だそれをしてしまっていないような行為、それがキーネーシスである。このようにあらゆるキーネーシスは固有の目的と終結点を持つため、いったんそれが完成されるとその過程は終わらざるを得ず、それを無際限に継続することはできない。例えば、木を切り倒す、というのは典型的なキーネーシスである。木を切り倒している時我々はまだ木を切り倒してしまっていないし、一旦木を切り倒してしまったならこの行為は完成、終結し、それをさらに継続することはできないのである。

この様にキーネーシスが自己の完成に向けられたそれ自身では未だ不完全な行為あるいは活動であるのに対して、エネルギーはそのあらゆる瞬間においてすでに完成されている活動であり、エネルギー自身の内に固有の目的や終結点はない。従ってあるエネルギーに従事している時我々はそれをしつつあると同時にすでにしまっている。又エネルギーはその始まりにおいてすでに完成されているため、外的条件の許す限りそれは無際限に継続される。例えば、テニスをする、という活動は一つのエネルギーであるが、テニスをしている各瞬間にテニスをするという活動はすでに完成されており、我々は決して「テニスをする」という目的を達成するために何か別のことを手段としてしているのではない。従ってテニスをするという活動に固有の終結点はなく、時間、体力といった外的条件が許す限り我々はこの活動を無際限に継続しうるのである。「話す」、「生きる」、「車を運転する」といった活動もエネルギーの例である。

このエネルギーの本質をとらえるためには上記の規定に加えて、キーネーシスの場合にはみられない主体に課せられた特別の条件に注目する必要がある。あるキーネーシスに従事するために主体に要求される条件は常に一般的である。例えば木を切るために我々は一般的な運動能力は要求されるものの、「木を切る」という行為に固有な条件はない。それに対して、テニスをするために活動主体はテニスをするという固有の能力を予め獲得、完成させていなければならない。さもなければ我々はテニスのまねごととは出来ても、テニスという活動に参加することはできない。一般にエネルギーは予め完成された特別な能力がしかるべき条件のもとで発現する活動であり、こ

うした能力をすでに獲得している主体のみがそれに従事しうる。こうした能力なしにはいかに努力しようとも主体はそれに従事することはできない。

アリストテレスは、この完成された「能力」と単になにかをする可能性を持っているという意味での「能力」とを明確に区別している。後者の意味では平均的運動能力を備えた人は誰でもテニスをする能力をもっているが、前者の意味では練習の結果テニスができるようになった人だけがテニスをする能力を持っているし、人間の赤ん坊なら誰でも後者の意味で日本語を話す能力を持っているが、前者の意味で日本語を話す能力を持っているのはしかるべき経験の後に日本語を習得した人のみである。『デ・アニマ』におけるアリストテレスの用語にもとづいて我々は前者の完成された「能力」をエンテレケイア（完成態）、後者の可能性としての「能力」をデュナミス（可能態）と呼びたい。<sup>6)</sup> あるエネルギーとはそれに対応したエンテレケイアの本来的な発現であり、そのエンテレケイアはそれに対応するデュナミスを元々持っている主体が一定期間の成長、訓練、学習といった過程を経て獲得するものである。この獲得過程自身はある目的、終結点に向けられた一種のキーネーシスである。このようにエネルギー、キーネーシス、エンテレケイア、デュナミスという概念は相互に動的な関係を持っており、一つ概念群として初めて十分に理解されるものであることに留意しなければならない。

行為主義的認識論の核心は、「知る」とは何かの目的に向けられたキーネーシスではなく、予め完成された知る能力のしかるべき条件下での自発的発現である、という点にある。

### III エネルギーとしての知識

「知る」という過程は一見すると典型的なキーネーシスのようにも思われよう。何故なら「知る」とは以前には知らなかった事を新たに知ることに他ならず、それは「無知」という状態から「知」という別の状態への移行、すなわちキーネーシスとして容易に理解されそうに思えるからである。従って行為主義的認識論にとっての次の課題は、いかなる意味で「知る」ということがキーネーシスでなくエネルギーなのかを明らかにすることである。

今仮に「何かを知る」とは相互に独立な「知る者」と「知られる物」の二者間の相



相互作用，すなわちそれらが互いに働きかけたり働きかけられたりする過程だと考えてみよう。この時「知る」とは，こうした相互作用を通じて「知る者」が「知らない」という状態から「知っている」という状態へと移行してゆくキーネーシス過程となる。このように考える時知識の学としての認識論の任務は「知る」というキーネーシス過程においてどのような相互作用を通じてどのような状態をもたらされるのかを明らかにすることにある。今この過程で「知る者」と「知られる物」の間にどんな働きかけ合いがあるのかに注目してみよう。

その候補として最も容易に思いつくのは物理的な相互作用である。これは、「知る」時に我々と知られる対象の間には二個の物体間にみられるような関係の変化があり，この変化のゆえに我々は以前に知らなかった事を知るようになるという考えである。しかしこれは二つの明白な理由のために全く不適切な答えだと言わなければならない。第一に「知っている」という状態がこのように二物体間の相互作用の総和としてもたらされるなら，例えば月と地球のように「知る」というカテゴリーの適用が問題外であるようなものについても知識の可能性が真剣に論じられなければならないだろう。しかしその時我々が論じているのが果たして当初「知る」事として特定された具体的な過程なのか，それとも認識論という知的行為のなかで我々の理解しやすさに応じて構成された理論的虚構のかが不明確とならざるを得ないのである。第二に，こうした相互作用が我々と知られる対象の間に成立するためには，（重力という相互作用を除いては）両者が接触する必要がある。しかし実際にわれわれがある対象を知るのは決してそれに触れることによるばかりではない。それを見たり，聴いたり，あるいはそれについて考えることによっても対象は知られる。従って「知る」過程を我々と対象の物理的相互作用と考えると，知識の対象が不当に狭められる。それは認識論の基礎としては受け入れられる考えではない。

このように考えると，「知る」過程が仮にキーネーシスであるとしても，「知る者」と「知られる物」の関係は決して両者の直接の相互作用ではありえず，なんらかの媒体を介したものとしてのみ理解される，ということが明らかとなろう。しかもこの媒体はそれを通じて我々が対象について何かを知るものであるから，対象との間にしかるべき関係を持っていなければならない。対象としかるべき関係を持ち，その関係の故に対象について何かを告げるこの媒体，それは我々が第Ⅰ章で「表象」と名付けたものに他ならない。つまり，キーネーシスの知識観と表象主義的知識観は実は同一な

のであり、前者には我々が先に論じたと全く同じ困難が伴うのである。

対象からある媒体が我々に到達し、この媒体と我々の相互作用の結果我々にある状態変化が生じたとしよう。しかしこの変化は「知る」ことの始まり、あるいは準備ではあり得ても「知る」ことそのものではない。何故ならこの時我々は差出人不明の手紙を受け取ったに等しく、その内容が信頼できるのかどうかについては未だにも知らないからである。かくして我々は対象について知るために、まずその媒体について知らなければならなくなる、しかしここで「媒体と我々を媒介するもの」を考えてみても、それは全く同じ問題をもたらすにすぎず、こうした媒体のやりとりというキーネーシス過程をいかに積み重ねても我々は「推測と懐疑」をからはなれて「知識」に到達することはない。こうしたキーネーシスの集積を知識へと転化するものの、それはもはやキーネーシスではありえない。知識を知識たらしめているもの、それはキーネーシスにあらざる何かでなければならない。

いうまでもなく、知識におけるこのキーネーシスを越えた要素がエネルギーとしての知識である、というのは我々の主張なのだが、一体いかなる意味で「知る」ことがテニスや会話のようなエネルギーたり得るのだろうか。それを明らかにするためには、キーネーシスとエネルギーという二種の行為の根本的な形式の相違に着目せねばならない。

我々の行為が「(対象) を (作用) する」, 「(対象) に (作用) される」という形式を持つ時、この行為はこの作用が完結した時に終結する。従ってそれはキーネーシスである。例えば「石をける」, 「馬にけられる」において「ける」は主体—対象間の作用を, 「石」と「馬」は作用の対象と主体を示しているが、それらはいずれも「ける」という作用が完結した時に終結するキーネーシスである。他方エネルギーはその始まりから完成され無際限に継続しうる行為であるから、こうした「(主体) が (対象) に (作用) する」という形式で表現できない。エネルギーは「主体」, 「対象」, 「作用」という要素から構成されているのではない。エネルギーを行為として表現するためには、一方で完成された活動を表示し、他方でその活動が現に発動していることを示す必要があるのである。従ってエネルギーという行為の一般形式は「(主体) が (活動) を する」でなければならないだろう。しかもここでの格助詞「を」は「石をける」のように作用の対象を表す「を」ではなく、「ダンスをする」のように活動を表す「を」であり、動詞「する」も特定の作用を表すのではなく、当の活動が現に発

動中であることをしめしているにすぎない。従って、例えば「正枝がテニスをする」と言った時、「正枝」という主体が働きかける対象としてテニスというものがある訳ではなく、テニスとは主体としての正枝が従事している活動の名に他ならない。

更にエネルギーの主体には特別な形式的条件が存在する。再びテニスを例にとろう。テニスは一人ではできないから、「正枝がテニスをする」とは必ず「正枝が誰かとテニスをする」ことでなければならない。しかし「正枝と太郎がテニスをする」と「正枝と太郎が殴りあう」の二つの行為はその表面上の類似にもかかわらず根本的に異なる形式をもっている。後者は二人の主体の間の作用のやりとりであり、「正枝が太郎を殴る」と「太郎が正枝を殴る」という二つの行為の和であり、そこには二つの独立した主体が存在する。それに対して「正枝と太郎がテニスをする」は「正枝がテニスをする」という行為と「太郎がテニスをする」という行為の和ではない。そもそもそれらは二つの異なる行為ではなく「正枝と太郎がテニスをする」という同一の行為である。テニスというエネルギーにあって二人の人間は殴り合いにおけるような互いに作用しあう二つの主体ではなく、「正枝と太郎」という一つの主体を形成し、テニスとはこの単一の主体の活動に他ならない。正枝と太郎は一緒に互いを殴り合うことはできず、他方彼らは一緒にならなければテニスができない。この違いは二つの行為の形式の相違に起因するものである。更にこの二人からなる単一の主体と、ラケット、ボール、テニスコートといったテニスに必要な要素との関係について考えてみよう。テニスという活動はけっしてこの二人が一緒になってそれらに作用すること（例えば二人の人間が協力して家を壊す場合のように）ではない。二人の人間はそれらの要素に働きかけるのでなく、むしろそれらと共に単一の主体を形成し、テニスという活動はこうした主体全体が持つ能力の発現（エネルギー）としてのみ実現されうるのである。それは「正枝が車を運転する」という活動が「正枝が車を壊す」のように「正枝」という主体の「車」という対象への作用ではなく、「正枝」と「車」からなる単一の主体による「車の運転」という活動であると同様である。

このように、あるエネルギーの主体として複数の要素が必要な時、それらは作用しあう独立した複数の主体を形成せず、むしろ一体となって単一の主体を形成する。かかる単一の主体の能力の発現としてのみエネルギーは可能であり、もしある行為が複数の主体間の相互作用であれば、それは作用の完結と共に終了するキーネーンスとならざるを得ないのである。

行為主義的認識論の核心は、「何かを知る」というのはこうした形式を持った活動（エネルギー）である、ということである。「知る」という行為が成立するには必ず「知られる何か」が存在しなければならない。それは「知る」という行為の形式そのものの論理的要求である。しかしこのことは決して我々が「知られる何か」に主体—対象として関わり、作用したりされたりすることを意味しはしない。「知る」という行為において「知る者」と「知られる物」はむしろ「車の運転」における「運転手」と「車」のように一体となり「この何かを知る」という一個の活動に従事している、というのが我々の見解である。「車を運転する」という行為が実は「車」という対象への作用ではなく「車の運転をする」という活動である様に、「何かを知る」という行為は「知られる何か」という対象への、あるいは対象からの、作用ではなく、「何かの認識をする」という活動だと我々は考えるのである。

いうまでもなくこの「知る」という活動は主体が無条件に、あるいは努力次第でなしうるものではない。エネルギーとは常に予め完成されたエンテレケイアのしかるべき条件下での自発的発現である。「ある何かを知る」という活動に従事するために我々は予め、しかるべき条件下でこの活動をなしうる能力を完成させていなければならない。もしビールを飲んだ時にそれがビールだと知ろうとすれば、我々は予めあるものがビールであるかどうかを知る能力（エンテレケイアとしてのビールというカテゴリーの知）を完成させねばならない。その後に初めて、ビールを飲んだ時我々はこの能力の自発的発現として何の苦もなくそれがビールだと知るのである。もしこの能力が未だ完成されていなければ、いかに努力しようとも我々はそれがビールだとは知り得ないのである。

#### IV 理論的知と非理論的知における「知る」という活動の実相

本論を締め括るに当たり、かかるエネルギーとしての知識という概念が、現実の我々の「知る」という体験をどの位忠実にとらえているかを、理論的知と非理論的知のそれぞれについて検討してみたい。

「知る」ことがエネルギーであるとすれば、上述のように我々と「知られる物」の関係は主体と対象のそれではなく、共に活動の単一の主体を形成するものでなければならない。しかし現実の体験を振り返ってみると、多くの場合「知る」という行為に

において我々は「知られる物」を様々な心的作用の対象とし、それに注目し、よって主体と対象として関わっているように思われる。それは特に科学的実践のような反省的な知識の生成において著しいように思われる。とすればエネルギーとしての知識という概念は少なくとも科学的認識には適用できないのではないだろうか。これはもっとも疑問であるが、もう少し具体的にしてみる時、事態はかなり違った様相を呈するのである。

先ず我々が注目しなければならないのは、二つの対象化の相違である。第一の対象化は未知なる物の対象化であり、この対象化はその未知なる物を我々が知ろうとしている時生ずる。今仮にこれを「原対象化」と呼ぼう。もうひとつの対象化は、すでに知っている物をそれを知るのとは別の目的のために対象化することである。例えば知人を狙撃するために狙うというのはこの第二の対象化である。この対象化を「再対象化」と呼ぼう。再対象化において対象はすでに知られており、対象化を通じての「知る」ということは起こらないから、それをいかに調べてみても果たして「知る」ことにおいて対象化がなされているかどうかは分からない。従って問題となるのは「原対象化」のみである。

しかし原対象化について注意深く考えると、「知る」と原対象化は両立しない相反するものであることがわかる。あるものを我々が原対象化する理由はその対象が我々に未知であるということである。もしその対象が何か知られていたなら、再対象化のための特別な動機が無い限り我々はそれを対象化することはない。あるものを原対象化する時、同時に我々はその未知なるものが何かについて様々な想定を巡らす。我々はそれを知ろうとするのである。しかしこうした想定はいかにもっともらしくとも想定にすぎず未だ知識ではない。このことは我々自身が常に自らの想定に対して「ひょっとしたら違うかもしれない」という批判的態度を抱き続けざるをえないことの内に現れている。知ろうとしつつ我々が原対象化を継続するのは、こうした批判的態度を解消する糸口をなんとか掴もうとせんがために他ならない。こうした原対象化—想定—批判的態度の形成、といった諸作用は現実には時間的に相前後して起こるのではなく、我々が未知なる物に遭遇する時に同時に生起し、我々の自覚された無知を表現しているのである。すなわち単に我々がその物を知らないばかりでなく、それを知らないということを知っているがゆえにこうした作用は生起するのである。このように原対象化は自覚された無知の指標であって、知識の相関者ではない。知らない

時、知らないが故に我々はあるものを対象化する。この自覚された無知における対象化を別の角度からみれば、それは我々と「知られる物」が主体と対象として分離し、「その知られる物の認識」という活動の単一の主体を未だ形成するに到っていないということに他ならない。それはこの「知られる物」を知る能力を我々が未だ獲得していないためか、その能力は完成されているもののそれが発現する条件が整っていないためかである。第一の場合には先ずしかるべき訓練、学習を経ない限り我々はこの未知の対象を知ることはできない。第二の場合には、そうした条件が整った時、我々の知る能力は自発的に発現するだろう。それは決して我々がそのために何かをすることによって生じるのではなく、我々が知られる物と共に事実という全体を構成し「知る」という活動に従事することにおいてのみ生ずる。その時我々は事実と接し、事実を事実として知るのである。我々がこうした活動に従事し、想定でなく事実と接している時、対象化—想定—批判的態度、それらの一切を我々は忘却し、ただ知るといふ活動に従事するのである。

今記述してきた自覚された無知を経ての知識の生成は科学的認識に代表される理論的知の一般的構造である<sup>7)</sup>。しかし何かを知る多くの場合我々はこうしたプロセスを経ることなく「知る」。すなわち我々が「知られる物」に接する時、それを知る能力が発現する条件がすでに整っており、我々は対象化や批判的態度を経験することなく直ちに事実と接する。この時我々の知る能力は活動しているにもかかわらず、批判的態度の欠如のために我々はどのようにしてこの活動が始まったかを全く意識しないし、また知らない。それゆえ、もしこの時なぜそれが事実だと知っているのか問われたなら、我々はなんら実質的な答えを用意することができないだろう。この時我々は事実を知りつつもその根拠を知らないという状態にある。こうした知識の形態が非理論的知と我々が呼んだものである。先程のビールのケースはその一例である。

以上の論述において、エネルギーとしての知識という概念の深化、その現実の経験への適用のいずれも極めて不十分であり、今後の考察に期さなければならないところは大きい。しかし一旦表象主義的認識論の虚構を知ったなら、懐疑論的な妄言によって我々の知性を曇らせることは不可能である。「知る」という我々にとって最も馴染み深く、同時に最もへだたった過程の本質を問うことは、「知る者」としての我々の本性に忠実であらうとする時我々が避けえぬ道である。行為主義的認識論はそれに

一つの道標を与えようとする試みである。

## 註

- (1) 「表象主義」という言葉が広く用いられているのに対し、それに対立する認識論上の立場に定まった名はない。「行為主義」というのはそれに対する我々の造語である。しかしそれはこうした視角から知識をとらえた哲学者がいなかったことを意味しない。そうした哲学者のなかにアリストテレス、スピノザ、J.L. オースチンを数えることができよう。
- (2) 現代英米認識論の基本的テーゼは「知識とは正当化された真なる信念である」というものである。この伝統に属する文献は膨大だが、その基本的立場と考え方は Chisholm, R. *The Foundation of Knowing* U. of Minnesota Press, 1982に見出せる。又主要な歴史的文献は Moser, Paul (ed.) *Empirical Knowledge* Roman & Littlefield 1986に収められている。
- (3) 前註参照。
- (4) 我々は実に高度に知的なエイリアンによって電極を通じ水槽中に生かされている脳にすぎない、という懐疑。cf. Nozick, R. *Philosophical Explanations* chap. 3。
- (5) とりわけ 1048 b 18-35。
- (6) アリストテレスによる *ἐνέργεια*, *ἐντελέχεια*, *δύναμις* の三語の使用法には表面上混乱が見られる。すなわち *ἐντελέχεια* は我々がエネルギーと呼ぶものとエンテレケイアと呼ぶものの双方に、*δύναμις* はエンテレケイアとデュナミスの双方に用いられている。しかし彼がこれら三つの概念をはっきりと区別していることは *ἐντελέχεια* と *δύναμις* のこの両義性について再三説明がなされていることから明白である。412 a 20-25, 417 a 21-417 b 5, 417 b 30。これら三概念の知識への適用 (412 a 20, 417 b 5-15) と『デ・アニマ』全般における用語を考慮すると、我々の用語法は必ずしもアリストテレスの意図からはずれていないように思われる。
- (7) 理論的知的構造の詳細については、Kikai, Akio *Philosophical Foundations for a Humanistic Ontology of Language*, unpublished dissertation at CUNY, 1990, chap. 2 参照。

〔哲学 研修員〕

# Knowing as an Activity

Akio KIKAI

In this paper, we criticize the traditional view of knowledge (*representational view of knowledge*), which takes knowing as the possession of a representation of the known thing. We argue that this view, which separates the knower from the known, can be an “explanation” of belief, which is what we assume about facts, but not that of knowledge, which brings about facts.

As an alternative, we argue that knowing should be considered as an *activity* (*energeia*) in the genuine Aristotelian sense. *Energeia* is an actualization of a completed ability which the agent has acquired through the process of training or development. Therefore, according to our view, we have to have completed the particular ability of knowing beforehand and to be in a certain condition under which this ability is spontaneously actualized in order to know a particular thing.

If that condition is met when we encounter the thing to be known, we come to know the thing without being aware of how we come to participate in the activity of knowing. In this case, we have no significant “story” about how we know the known thing. We call this type of knowledge *atheoretical knowledge*. On the other hand, if this condition is fulfilled as the result of our conscious efforts, we have a certain “story” about how we come to know the known thing. We call this type of knowledge *theoretical knowledge*. Their essential difference consists not in the nature of *knowledge*, but in the process through which we come to participate in the activity of knowing.